

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2014年11月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.42

発行日 平成26年11月20日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫



2014年9月20日ラリール

初霜の便りも聞かれる季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。去る9月20日土曜日の「純正律音楽コンサート」では、ヴァイオリンとハープとお箏が、素晴らしく美しいハーモニーを奏で、多くの方々にご来場、ご賞賛頂き、誠にありがとうございました。

次回コンサートは来年2015年1月10日土曜日13時開演、洗足学園内シルバーマウンテンです。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

テレビ東京では、昭和54年から毎年1月2日に長時間の娯楽時代劇を放送していますが、開局50周年の節目の年に放映する来年の37作品目に、玉木宏樹が作曲したテレビ時代劇「大江戸捜査網」が、2015年1月2日新春ワイド時代劇として「大江戸捜査網2015(仮)」高橋克典主演で放送いたします。

「大江戸捜査網は」1970年から1992年までテレビ東京にて、足かけ22年全713話が放送され「水戸黄門」「銭形平次」などと並び称される民放時代劇の長寿番組でした。是非御覧下さい。

秋 徒 然 に

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

秋の終り？冬の始まり？秋を堪能しないうちに冬に突入！そして2014年のカウントダウンが始まってしまいました。会員の皆様いかがお過ごしでしょうか？

今年は急に冷え込み北の地方では雪の便りも....でも各地の紅葉は素晴らしいようです。洗足学園の私のレッスン室からも日に日に色づく景色を楽しんで毎日レッスンに励んでおります。

さて、CDがリリースされて5ヵ月、いろいろな場所で聴いていただいているお話を多く聞きますし、初版がそろそろ無くなり再版を計画していると事務局長の相坂さんからうれしい報告も受けています。また、ホテルニューオータニのレストラン「トゥールダルジャン」や、洗足学園そばの和食「久善」、ラジオ等でかけていただいて嬉しい限りです。先日、10月7日に港北区の童謡の会100会記念コンサートで「タイスの瞑想曲」「津軽海峡冬景色」「男はつらいよ」「愛燦燦」など、最後にはモンティのチャルダッシュを弾きながらお客様の間を練り歩き、大喝采をいただきました。「CDはここではほとんど売れたことはありませんよ！」と代表の吉田さん。ところが、終演後CD売り場ではジャンプ状態....握手攻め、持っていったCD60枚は即座に完売....30枚ほど予約を受けて11月の童謡の会にお持ちすることになっています。とにかく、タータララララララララ〜と「男はつらいよ」の冒頭を弾きだした時のざわめき！チャルダッシュが始まったと思ったら「津軽海峡冬景色」が始まって、サビの部分でのだよめき！とにかくお客様たちと歌い、笑い、とても楽しい時間を私と過ごしていただいたようです。でもこれができるのも、玉木さんが残してくれたすばらしい財産、オリジナル曲と編曲の数々があるから。きっと天国で笑って見ていらっしゃることでしょう！時々は私に乗り移ることも最近はあるようですが、、、（笑）

玉木さんがよくお話されていたのは、「ヨーロッパのロックバンドの人達はとても美しいハーモニーときれいな音でひいているんだよ！彼らは小さい時から教会に通い讃美歌を歌ったりしているからハモることを知っているんだよね！」と。

1991年に亡くなったクイーンのフレディ・マーキュリーとマイケル・ジャクソンとセッションしている曲が現在の技術でよみがえったというニュースがありました。もちろんギターのアラン・メイさんドラムスのロジャー・テイラーも入られていますが、聴いてびっくり！実に美しいハーモニー！音量は大きいのですが本当に綺麗なのです。よく耳にするロックはとても賑やかな音で耳栓が必要なこともあります....フレディとアランのヴォーカルとギタ

一の対話も素敵でした。実によくアンサンブルができています。普段はあまり聴く機会のないロックですが、思わず聴き惚れてしまいました。

この秋はコンサートの多いシーズンでした。ミュージア川崎で震災ヴァイオリンを使っただけのコンサート、この日は電子オルガンの赤塚博美さんと「日本の調べ」からも演奏しました。またラリールでは純正律のコンサートを三宅美子さんと吉原佐知子さんとCDに入っている曲から演奏。そして港北公会堂のコンサート。ビュッフエ克蘭ポンのポスターの写真にも出られている世界のクラリネット奏者武田忠善氏の紀尾井ホールでのリサイタルで、プラームスのクラリネット五重奏曲を演奏。そしてあくる日にはみなとみらいホールでの「ヴィルトゥオーゾ横浜」の定期演奏会でした。このコンサートでは東京クアルテットでご活躍された池田菊衛氏をゲストにお迎えして、夢のような共演を果たしました。池田氏には2ndヴァイオリンのトップで弾いていただいたのですが、2ndヴァイオリン以下ヴィオラ、チェロ、コントラバスのまとまり、バランス、曲の構成等素晴らしく、その上で私の1stヴァイオリンが自由に弾かされてる！そんな感じでした。

私がコンサートマスターの場所に座っているわけですが、必要な個所で呼吸を合わせたり、見合うのですが、44年間の東京クアルテットで世界中を駆け巡って大活躍された池田氏のオーラと眼の輝きには脱帽でした。おかげさまで、すばらしい演奏会になりました。この私達合奏団も平均律ではない音程をとっているため気持ちの良いハーモニーだったようです。

11月にはいり、ウイーンフィルで大活躍されたペーターシュミードル氏とモーツァルトのクラリネット五重奏曲を共演させていただきました。この曲は、K. 581、そしてシュミードル氏がこのクラリネット五重奏曲を演奏したのが581回目という記念すべきコンサートでしたが、この曲を知り尽くしたシュミードル氏と共演できたことはこの上ない幸せな時間でした。そして、アンコールに蛍の光のメロディーが入ったアイネクライネナハトムジークの編曲バージョンを弾きましたが、最後にアップテンポの蛍の光を私が歌い、シュミードル氏も大喜び、お客様からも拍手喝采！！楽しかったです。

そして21日には、東京芸術大学の卒業生の組織、同声会の神奈川支部の主催で「レクチャーコンサート」卒業生の先生方を前に、ヴァイオリンの魅力と純正律について語ってこようと思います。(本当はドキドキ！成功するか心配ですが！?!?)

年内は小さいコンサートもいくつか続きますが、必ずCDの曲から弾かせていただいています。

来年1月に入りますと、

10日に洗足学園シルバーマウンテンで三宅美子さんと吉原佐知子さんの純正律音楽研究会のコンサート。

13日に昨年不慮の事故で亡くなられた「タチアナ チェキーナ」の追悼コンサートをカナックホールで、ご主人のバイオリニストのオレグ クリサ教授と息子さんのペーター クリサ氏とモーツァルトのヴァイオリンとヴィオラの二重協

奏曲他、私はもちろんですが、荒井章乃、松尾茉莉、毛利文香、山根一仁等たくさんの方が出演するコンサート。

25日には横浜鶴見にあるサルビアホールにて新進のピアニスト泉ゆりのさん、荒井章乃とのコンサートがあります。玉木さん編曲の二台ヴァイオリンによる花のワルツ、愛燦燦などを弾く予定になっています。

3月14日には三宅さんのお友達で9月のコンサートの時に聴いていただいた中村美香さんのご協力です。藤沢で純正律音楽研究会のコンサートが決定いたしました。

皆様、ぜひ事務所の相坂さんにご連絡をとっていただければ幸いです。

最後に一つ、最近、エド・ヨンさんという生物学者のレクチャーをTVでみました。寄生虫が宿主をマインドコントロールをしてコウロギやバッタが川に飛び込まされたり、「宿主を生きたまま食い尽くし」「体をぶち破って出てくる」など面白く興味深い話でした。そのうち人間の脳もマインドコントロール?! と考えた時に、この私達の純正律音楽が寄生虫のように人間や自然界、生き物に入り込んだら、世界は平和になるのでは?!?!?!

ムッシュ黒木の純正律講座 第41時限目

平均律普及の思想的背景について(30)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回までに、一見落書きにしか見えない前衛絵画にも歴史的・政治的なレゾナントルが存在することを説明した。対して、前衛音楽にはどのような意味があるのだろうか？

伝統的な作曲書法における禁則事項を破ることによって、新たな書法を開拓しようといった意図は、ドビュッシーにおいて見受けられる。例えば、平行五度の積極的な使用が挙げられるだろう。この書法の開拓が、ドビュッシーを「調性の崩壊」という現象の創始者の一人と見なされる理由となっているという見方は確かに間違っていない。

では、この「調性の崩壊」は、前回までに述べた絵画において印象派が成し遂げた「革命」とどの程度共通点があるのだろうか？ 正直に言うと、世紀末における詩文や絵画の「革命」とは違って、音楽に関しては思想的あるいは理論的背景は希薄である。ドビュッシーの試みは、とにかく先人のやっていない奇抜なことを成し遂げたい、という欲望に支えられており、そのような活動は何より彼が師と仰いでいた詩人ステファヌ・マラルメと、そのマラルメがフランスに紹介したアメリカの詩人エドガー・アラン・ポーの影響によるものと言って良い。ポーにせよマラルメにせよ彼らの詩の理論は高度なものだ。現在に至るまで研究者たちが躍起になってその解明を続けている。それに対してドビュッシーがこれらの詩人たちの思想をきちんと理解していたかどうかは大変疑わしい。ただ、この音楽家には、理屈は分からないまでも面白そうなことを嗅ぎつけるセンスはあったようで、マラルメのもとに通いつめ、また詩人

の周りに集まる前衛の画家や若き文学者たちと交流を得ていたのは、教養には欠けるが新しいもの好きの音楽家にとっては悪くない選択だったと言える。敢えて言ってしまうと、一見奇抜で斬新に見える詩作品を発表するマラルメに習って芸術活動を展開したい、という思いに支えられて、なんとか独自の音楽語法を編み出すことに成功したということだろう。幸いなことに、彼は芸術的センスだけには恵まれていたようだ。

そのドビュッシーの前に現れたのが当時最新鋭の楽器である平均律に調律されたピアノであった。彼はこの楽器の特徴を最大限活かした作曲語法を確立することになる。それが所謂「調性の崩壊」の萌芽とも言われている書法だ。つまり平均律はオクターブ以外ハモらない調律なので、そのハモらない特性を活かした書法が「調性の崩壊」の萌芽になったというわけなのである。このピアノにはそれまでの木製のフレームに代わって鉄製のフレームが採用されていた。金属に共鳴することによって、ピアノはより硬質の独特の音響を獲得する。現在我々が魅了されるピアノの響きが誕生したというわけだ。さて、ハモらない平均律の音程の中でも5度音程は比較的ハモるように調律されている。その5度が金属フレームに共鳴してできる独特の音響効果にドビュッシーが目をつけたことは想像に難くない。それまでの禁則事項を破っても、新たに得られる音の響きの面白さに彼は惹かれたのである。そしてこのよく響く5度の使用が「調性の崩壊」という現象へと彼を導いたと言っても過言ではない。

確かに、ドビュッシーは師であるマラルメの詩学を理解はできなかったが、それを補って余りあるセンスの持ち主であり、それ故に当時の最新鋭であったピアノという楽器を駆使して新たな作曲書法を編み出すことに成功した、というのが実情であろう。

贋作・盗作 音楽夜話から <アル中と賭博好きの作曲家たち、その2>

玉木宏樹遺作

ロシア民族主義作曲家グループ、ロシア5人組(バラキレフ、ボロディン、リムスキー=コルサコフ、ムソルグスキー、キュイ)には、貴族出身者が二人いました。一人はボロディンで、女学校の教授、ロシアで有名な化学者で教育者、その合間をぬっての日曜作曲家でしたが、とても尊敬された人物でした。それに比べ、もう一人の貴族、モデスト・ムソルグスキーは没落貴族で悲惨な生活を送りました。彼の代表作のひとつ、「展覧会の絵」は、生前に演奏されたことはありません。彼は裕福な家庭に育ちましたが、時代の流れの中、農奴解放のため、地所がどんどん減り、没落の一途をたどり、彼は酒にのめりこんで行きました。5人組のリーダーはバラキレフだったのですが、一番有名になった実力者は R=コルサコフ(エカテリーナの愛人だったのでは？との噂もあります)で、作曲の基礎が全くないと思った R=コルサコフはムソルグスキーの死後、いろんな曲を書き直しており、有名な交響詩「禿山の一夜」もそうだったので

が最近は大ムソルグスキーの原典でやることも多くなってきました。アル中の大ムソルグスキーの書いたスコアはかなり変なのですが、その破壊的な個性も最近は見直されています。40 過ぎた大ムソルグスキーはアル中のため、入院療養をしていたのですが、何とそこへ見舞いに行った友人が酒を持ち込んで進呈してしまったからたまりません。大ムソルグスキーは一気に飲み干しそのまま昇天しました。

ロシアは寒いので、ウオッカを始めとしたアルコール類は必需品です。話は横道に外れますが、松本清張の「砂の器」が映画化された時の音楽監督が芥川也寸志氏で音楽は菅野光亮氏。映画の終りの方で延々と流れるピアノ協奏曲は、その菅野光亮氏の作曲なのです。彼と私は実は芸大時代同学年でした。しかし彼は作曲科で私はヴァイオリン、しかも彼は他の大学経由なので4年上、というわけでお互い、顔は知っていても、話をしたことはありませんでした。その後も全くつきあいもなく、私は映画館で見た「砂の器」で彼の名を見て、へえー、こんなことやっているんだと驚いたりしたものです。しかし、その後も、彼の消息は聞かずじまいでしたが、その後何年かたち、風の噂として、彼が死んだということが伝わってきました。そこで私は彼と比較的親しかった人に連絡を取り、仰天の真相を知りました。菅野さんが仕事で冬のモスクワへ行った時、彼は外へ出ようとしてロシア人から止められました。

「どこへ行くんだ？」

「少し先の別のホテルに仲間がいるからそこへ行くつもりだ」

「ミスター菅野、それは絶対ダメだ。お前はウオッカを一滴も飲んでないだろう。」

「もちろん。自分の体は酒を受けつけない。以前に無理矢理飲んでひどい目に会ったことがある」

「じゃ、ここでじっとしているろ」

「そりゃダメだ。どうしても行かなきゃ」

「どうしても、と言うんなら、これを飲め」

と言って、とてもきついウオッカを飲まされたのです。彼も薬と思って飲んだようですが、その後、外出する時はいつもウオッカを飲むようになりました。そして日本に帰ってきた彼はすっかりアルコール中毒になってしまい、めざめたらすぐに酒を飲まずにはいられない体になってしまったそうです。そして、朝から仕事の場合は水筒にたっぷり酒を入れて持ち歩くようになりました。そんなある日、彼は一の橋のアオイ・スタジオで朝10時からの仕事で自分の曲を指揮しているとき、発作で倒れ、帰らぬ人になってしまいました。気の毒ですね。合掌。

アル中大国、ロシアですから、大酒飲みの作曲家はたくさんいます。次のアントン・アレンスキー(1861~1906)は、R=コルサコフの弟子ですが、たいへんチャイコフスキーに傾倒していました。作品は魅力あるメロディを中心とした、繊細で叙情的な作風ですが、そんな雰囲気とは正反対に大酒飲みで賭博好きで体をこわし、最後は結核で倒れました。R=コルサコフは「アレンスキーの作品なんてすぐ忘れるだろう」と言っていたのですが、とても美しいピアノ・トリオを始めとした数曲は、今でも細々と演奏されています。

CD レビュー 純正茶寮
〈Aranis〉
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

MADE IN BELGIUM II

Aranis

レーベル: Disk Union (原盤: Home Records/BELGIUM)

ASIN: B00NG7Q9QS



以前紹介したベルギーの室内楽ロックバンド ARANIS が新譜を発表した。ロックにもかかわらず、コントラバス、ヴァイオリン／ヴィオラ、フルート、アコーディオン、ギターとピアノというアコースティックな編成である。前作同様にベルギーの作曲家による楽曲をコントラバスのヨリスが編曲し、演奏している。ヨリスのセンスが素晴らしい。

アコーディオン、ギターやピアノといった平均律の楽器が使用されているにもかかわらず、彼らを取り上げるのは、モードを活かした編曲法が純正律音楽の参考になると考えるからである。確かにこれらの楽器で和音をじゃかじゃか鳴らせばうるさくなる。しかしモードで対位旋律を交差させるやり方で組み立てていけば、平均律の煩わしさは回避できるということだ。

特筆すべきはやはりピアノのピエール・シュバリエだろう。Univers Zéro や Présent などのベルギーのチェンバーロックバンドでの活動歴を持つだけあって、タッチのキレが良く、ピアノのメロディ楽器の側面というより、打楽器的な側面を十分に引き出しているように思う。つまりピアノが刻むリズムにヴァイオリンやフルートのメロディが絡み合うと捉えれば、こういう作曲法もあったのか、と純正律音楽ファンにも納得がいくというものだ。

やはり、彼らがアコースティックな編成を選びつつも室内楽ではなく、ロックという活動の場を選んでいるかと言えば、そのリズム感だろう。クラシックの専門の教育を受けていれば、複雑な変拍子と言えど楽譜通りに弾きこなすことは決して不可能なことではない。しかし、彼らのようにロックのビート感を出せるかと言えば話は別だ。そこはアコースティックな楽器を使ってもベルギーの先人たちのロック音楽に対する愛が溢れている。

特に一曲目「Skip XXI」が印象的である。原曲はX-legged Sally。X-legged Sally
と言えば、金管セクションによるファンク色を前面に出しながらも、ギターのリフがハードロックを演出し、狂ったような変拍子が畳み掛けてくるという奇妙奇天烈なロックバンドである。あの曲がこんなにしとやかに演奏されていることにヨリスの編曲能力の高さを感じる。

靖国問題

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

1. 靖国神社の前身

靖国神社の前身は戊辰戦争の戦没者を祀った明治2年創建の「東京招魂社」である。設立を建言したのは、靖国神社内に大きな像が建っている大村益次郎である。

「東京招魂社」が創建された理由は、改元後間もないころから、全国各地で慰霊のために創られていた「招魂社」の総本山となる様な神社を東京に創ろうと言うことであった。創建の前月にあたる明治2年5月18日に「戊辰戦争」が終結した。同年6月29日に開かれた第1回の祭典では、「戊辰戦争の新政府軍戦没者」の3588名が祀られた。戊辰戦争は鳥羽伏見の戦いから函館戦争（五稜郭の戦い）までをさす内戦である。しかし、「国難従事者と認定された一部以外、旧幕府軍関係者はひとりとして、祀られてはいない。然も東京招魂社で年に4回あった「例大祭」も、みんな戊辰戦争に関わるものであった。

1月 3日 鳥羽伏見の戦い終結
5月15日 上野戦争終結
9月22日 会津降伏
5月18日 箱館降伏

その後、合祀の基準が「国のために殉死した人」に変わっていくのであるが、旧幕府勢力の戦死者は、合祀されることはなかった。

2. 東京招魂社から靖国神社へ

明治に入ると、武士階級が廃止され、彼らは「士族」と呼ばれた。その氏族に対する秩禄支給が新政府の財政を圧迫したため廃止された。この為、士族のあいだに不満が募る様になり、各地で士族の反乱が起きた。

明治10（1877）年に勃発した西南の役は、一連の士族の反乱の内、最大のものである。

東京招魂社が靖国神社へ改称されたのは西南の役の直後のことであった。そして、幕末維新の時代において尊王攘夷の思想を持ち、それを実現するために亡くなった志士たちを靖国神社へ合祀する様になった。そして、勤王の志士として活動し亡くなった者は、「維新殉難者」と呼ばれ、やがて「国事殉難者」と呼ばれるようになる。この国事殉難者から、戦後「昭和殉難者」という言葉が生まれた。

そして現在、靖国神社には、戦死した軍人ばかりが祀られているのではない。尾川正二「戦争虚構と真実」によれば、下記の人達が含まれている。

- ・ 5万7千余の女性も含まれている。従軍看護婦その他女性
- ・ 沖縄で亡くなった「ひめゆり」・「白梅」など、7女学校部隊の生徒
- ・ 「対馬丸」で沖縄から鹿児島へ疎開中、敵潜水艦に撃沈された小学生たち
- ・ 学徒動員で軍需工場などで爆死した学生、生徒たち
- ・ 1945年8月20日、ソ連の侵入を最後まで日本に通話し続け、ついに自決、殉職した樺太真岡の女子電話交換手の方たち…なども祀られているのである。

3. 西郷隆盛は合祀されているか。

靖国神社には、旧幕府軍は一切合祀されていないが、「官軍」か「朝敵」かで合祀が決まるわけである。その場合西郷隆盛が一番問題になった様である。明治維新の原動力となった西郷隆盛は「朝敵」となって武力反乱を起こし切腹となった。西郷を擁護する意見も多く出たが、結局合祀を見送られている。

また、井伊直弼を討ち果たした水戸藩の勤皇浪士など、幕府側と思われても「勤皇」の意志が明確だった人は合祀されている。

但し、靖国神社には、昭和40年に「鎮霊社」という社が建立され、そこには本殿に祀られていない日本人の御霊と、世界各国全ての戦没者の御霊が祀られている。そこには西郷隆盛や白虎隊の少年たち、戊辰の佐幕派も祀られている。

4. A級戦犯の合祀

戦後靖国神社の第5代宮司を32年間もの長きにわたってつとめたのが元皇族の筑波藤麿であった。筑波は、明治38（1905）年に皇族のやましなのみやけ きくまるおう

山階宮家第2代の菊麿王の第3王子として生まれた。学習院高等科を卒業した後、東京帝国大学文学部国史学科に入学し、大学院にも進んで、古代史の研究者としての道を歩んでいく。

昭和3（1928）年に臣籍降下して、筑波侯爵家を創立する。大学院修了後は、自宅に「筑波家研究部」を設け、そこで研究活動を続けた。

その筑波が靖国神社の宮司に就任するのは、敗戦となり、軍とは遠い立場にある人間を靖国神社の宮司に選ぶ必要が生まれたからである。昭和21年1月25日、筑波は、その時点ではまだ別格官弊社であった靖国神社の宮司に就任し、その1週間後には、国の手を離れ、宗教法人令のもとで一宗教法人となった靖国神社の宮司をそのままつとめている。

この筑波宮司は長らくA級戦犯合祀に保留状態を続けたという。

筑波に代わって第6代の靖国神社宮司に就任したのは、元海軍少佐で、戦後は陸上自衛隊に入り、一等陸佐として退官した後は、福井市立郷土博物館館長まつだいらしゅんがく よしながを務めていた松平永芳であった。祖父の松平春嶽（慶永）は第16代の越前福井藩主だった。同じ福井出身の元最高裁長官の石田和外氏の推薦で松平氏は、第6代宮司を引き受けたそうである。この松平氏は、東京裁判を否定しなければ、日本精神の復興は出来ないと考えるを持っており、松平氏がA

級戦犯の合祀を行ったのは必然である。そして、1978年（昭和53年）10月17日、A級戦犯を合祀してしまった。

なお「A級戦犯」とは戦後に戦勝国が行った戦犯裁判で使われた言葉であり、「A級」は戦争を遂行した国家指導者など、「B級」は戦場で命令する立場にいた指揮官など、「C級」は実行した兵隊などを指した。しかし、これは罪の重さをランク付けしたのではなく、実際にB・C級でも1061人が死刑になっている。

5 天皇陛下靖国神社御親拝について

昭和50（1975）年11月21日の昭和天皇、皇后両陛下の靖国神社御親拝を最後に、天皇陛下による御親拝は行われていない。その理由は、昭和53（1978）年11月に行われた「A級戦犯の合祀」が原因だとする説がある。

昭和天皇が、A級戦犯合祀に強い不快感を示し、当時の宮内庁長官、富田朝彦氏に語っていたとされ、日本経済新聞がスクープした「富田メモ」なるものが存在すると言う。これに対しては、明治天皇の玄孫であられる竹田恒泰氏、日本大学教授の百地章氏等の数多くの反対説もある。

今上天皇は、皇太子の時代に靖国神社を参拝しているが、天皇に即位して以来、26年間一度も親拝していない（天皇が自ら参拝することを親拝と呼んでいる）。昭和天皇は、終戦後、8回も靖国神社に親拝している。

しかし、そもそも天皇の靖国神社親拝には問題がある。私人としての参拝と言っても、その警固に国費が使われることは明らかであり、天皇による私的参拝など理論的にはあり得ない。

連合諸国（日本では極東委員会とか対日理事会と言った）が決断して軍事法廷を開いて裁いた東條英機たちの霊魂が、1978年から靖国神社に祀られることになった以上、裁いた側の連合諸国側の元首である大統領やヨーロッパ諸国の首相や国王が、来日したときに靖国神社に参拝出来る訳がない。まずここを理解しないと靖国問題のスムーズな解決はあり得ない。誤解のないために言うておくが、筆者は日本の首相が参拝することには、何ら反対はない。

6. ハル・ノート

靖国問題を語るときに、どうしても触れなければならないのは、日米開戦の事である。

昭和16年12月8日、日本はアメリカとの開戦に至った。そして4年に及ぶ戦争は、昭和20年8月15日、日本の敗戦によって終結した。

勝ち負けを度外視してまで開戦に踏み切った理由は何か。それはハル・ノートである。正式名称は、合衆国及び日本国間の基礎概略と言う。開戦前夜の昭和16年11月26日アメリカ國務長官コーデル・ハルが日本政府に対して通告してきた文書である。さほど長くない文章であるが、これを本当に読んだ日本人は、どの位いるだろうか。ハル・ノートの主な内容は以下の通りである。

- ・支那大陸やフランス領インドシナからの即時無条件完全撤退
- ・汪兆銘政権（南京政府）を見捨てて重慶の蒋介石政権（重慶政府）を支持すること

・日独伊三国同盟の死文化（事実上の破棄）

このハル・ノートは財務次官補ハリー・ホワイトが起草したもので、このホワイトなる人物はソ連のスパイであった。

このハル・ノートに対して、東京裁判でインドのパール判事は、「ハル・ノートのような通牒を受け取ったら、モナコやルクセンブルグ大公国でさえもアメリカに対し矛をとって立ち上がったであろう」と述べた。

なお、パール博士顕彰碑は、靖国神社の境内にある。

7. 遊就館の由来

遊就館は祭神を慰霊顕彰するために遺品を展示する施設だが、日本で最初の軍事博物館として明治15年に開館された歴史があり、靖国神社の附属施設とはいえ、日本の軍事博物館としての性格を併せ持っている。

遊就館に流れている思想は軍国主義礼賛であると言う。もしそうであるならば、各国にある軍事博物館も全て軍国主義礼賛となってしまう。しかし、そうではなかろう。そこには、少なくとも各国の軍事に関する歴史が展示されており、その歴史を知る事は重要な事である。

語源は、中国の古典、『荀子』勸学篇「君子は居るに必ず郷を擇び、遊ぶに必ず士に就く」から「遊」「就」を撰んだもの。国のために尊い命を捧げられた英霊のご遺徳に触れ、学んでいただきたいという願いが館名には籠められている。

8. 鎮霊社

昭和44年第61回国会に自民党が靖国神社法案を提出した。必ず、靖国神社の合祀は戦死者だけではないか、官軍兵士だけではないかと論議されることが想定されるので創建したのが鎮霊社だと言われている。鎮霊社には世界のあらゆる国の戦没者が祀られている。ここには第二次世界大戦で、旧日本軍と戦った米国人や中国人なども含まれている。

2013年の安部首相の靖国参拝は、本殿だけではなく鎮霊社も参拝した。

9. 国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑

先の大戦に際し、海外の戦場で戦没された方々は、軍人・軍属で約210万人、それに戦渦に巻き込まれて死亡した一般邦人約30万人で、合わせて約240万人と言われている。昭和27年頃から、政府により御遺骨の収集が開始されたが、収集した御遺骨で氏名不詳の為に遺族にお渡し出来ない御遺骨をどうするかが問題となった。

戦没者墓苑が計画され、昭和31年12月4日に、建設地を千鳥ヶ淵とすることが決定された。そこは賀陽宮家の宮邸があったところで宮内庁の管理地となっており、約5000坪が戦没者墓苑用地として使用されることになった。宮邸の前は薬草園であったところである。昭和33年7月に着工され、昭和34年3月28日に竣工している。

御遺骨は、この墓苑の納骨室に収めてあり、現在、36万96柱（平成26年5月26日現在）の御遺骨が奉安されている。いわば「無名戦士の墓」といべきものである。

10. ローマ教皇庁と靖国神社との縁

靖国神社は、ローマ教皇庁（現在は、ローマ法王庁とは言わず、ローマ教皇庁が正式の名称であるので念の為）とは、以下の様な縁がある。

- ・靖国神社といえば、戦争直後のアメリカ占領軍が文明の条約の基本となったウェストファリア条約に反して、この神域をドッグレース場にしようとした。これをやめさせたのは、上智大学の教授で駐日ローマ教皇庁ヴァチカン公使代理でもあったブルーノ・ビッテル神父だった。
- ・1980年5月21日、昭和殉難者のために、荘厳なミサがヴァチカン・サンピエトロ寺院で行われた。
- ・ローマ教皇庁・ヴァチカンには、昭和の殉難者1068柱の霊が祀られている。連合国の手で「戦犯」として裁かれたABC級すべての日本人「法務死」者の霊が、世界のキリスト教カトリックの総本山ヴァチカンに、他ならぬローマ教皇によって祀られたのである。

11. 自衛官には「戦死」はないのか。

自衛官は、他の公務員と同じ「国家公務員災害補償法」による公務上死亡、いわゆる殉職しかない。1954（昭和29）年の自衛隊創設以来、現在まで1,800人以上にのぼる殉職自衛官がいる。この数は、一般職の公務員にはない「職務遂行上の危険性」に由来している。通勤途中に交通事故で亡くなった公務員と、国を守る職務中に命を落とした自衛官とが同じ殉職と扱うのはおかしい。

殉職自衛官のためには、自衛隊市ヶ谷駐屯地に、「自衛隊殉職者慰霊碑」が建立されている。これは1962（昭和37）年に建てられ、その後、老朽化によって1980（昭和58）年に建て替えられている。

12. 「靖国問題」はどう解決されていくのか。

靖国問題は、立場によって様々な考え方があり、中国、韓国の周辺諸国の考え方、最近はそこにアメリカまで出て来た。その上、政教分離と言う難しい法律問題も関係して来る。

「A級戦犯を分祀しろ」とか、「別の国立の施設を作るべきである」とか様々な意見があるが、最近ユニークな意見が出て来た。宗教学者の島田裕巳氏は次の様に言っている。殉職乃至戦死した自衛官を靖国神社に祀れと言うのである。

「戦死した自衛官を靖国神社に祀ったとき、同時に、長かった『戦後』も終わる。日本は、二度としないと誓った戦争にふたたび突入したことになるからである。

そして、そのときの首相は、戦死自衛官を合祀する合祀祭に参列することになるだろう。それは、これまで言われてきた公式参拝に相当する形式で行われるに違いない。天皇の親拝ということも、そうした状況になれば再開されるかもしれない。

もちろん、そうした首相、ないしは天皇の（公式）参拝に対して、政教分離の原則に違反しているという声は上がるだろうが、それはあまり大きな声にはならないのではないだろうか。声を上げにくい状況が生まれているかもしれないからである。」（幻冬舎新書「靖国神社」213ページ）

以上

【日本の音楽教育はまちがっている】

玉木宏樹遺作

☆音楽教育の義務化の有無を考えよう

まず日本の音楽教育の根幹にかかわる疑問を提出しよう。それは音楽を義務教育の必要科目にする必要があるかどうかということだ。何ということをして！とんでもない奴だと唾然として怒りだす人もいるかも知れない。しかし、逆にこちらから聞きたいくらいだ。そういう疑問をもった人は、何人くらいいるだろうか。

ヨーロッパでは、音楽は義務教育の必修にはなっていない。やりたければ家庭でどうぞというわけだ。

音楽教育なんて本来、歌を歌ったり、音楽を鑑賞するための手引きとなるためのものはずなのに、全員に強制的にドレミを教えてどうしようというのだろう。

学校で教わった「ドレミ」の意味が未だに分からない、だから音痴で音楽に向いていないと思いついでいる人は結構多い。

まず「ドレミ」のことを考えてみよう。小学校のときから「ド」と「レ」、「レ」と「ミ」の間は、全音と教えられ、次の「ミ」と「ファ」の間は半音だと教えられる。私は子供のころから、突然と「ミ」と「ファ」の間が半音になるのが、どうしても理解できなかった。もちろん、「シ」と「ド」も同じことなのだけど。

私自身は小学校以前から歌ばかりうたっていた上に、クラシックギターを趣味としていた父からドレミの手ほどきは受けていたので、楽譜は五歳の時から殆んど完璧に読むことはできたし、「トニイホロヘハ」や「ヘロホイニトハ」の関係も知っていた。そんな私がヴァイオリンを習って芸大に入り、プロになった今でも、この問題は解けていない。もちろん、現在の疑問は楽譜表記の問題にすり変わってはいるが。

もう一度戻るけれども、突然半音になるといわれる「ミ」と「ファ」の問題は、音楽の先生達はピアノの鍵盤を見せて教えるという。「ミ」と「ファ」の間には、黒鍵、つまり半音の音がないではないか、だから白鍵は普通、全音なのだけど、「ミ」と「ファ」そして、「シ」と「ド」の間には、黒鍵がない。だからこの二つの間は半音なのだ、と教えるそうで、またこれで、大半の子供は分かったつもりになるらしい。

しかし、これは変だ！ 絶対に変だ！ 私はバイオリン奏きで、作曲家になった今、こんな教え方のものすごいインチキ臭い、胡散臭さには、腹が立ってしょうがない。もしそれが本当なら、今の音階はピアノが作ったことになるが、ピアノなんてたかだか 200 年くらい前に発明されたもので、ドレミの音程関係は、ピアノなんかなんの関係もない、ギリシャ時代、いやもっと前から存在しているのである。

音楽理論上のなんでもかんでもすべてを、ピアノの鍵盤におきかえて説明するのは、とりあえず便利であるということ以外に根拠はない。「ミ」と「ファ」が

半音なのは、ピアノの鍵盤に黒鍵がないからではない。話は逆であって「ミ」と「ファ」が半音のために、黒鍵を入れられないのだ。もうちょっと高級な説明をするなら、「ミ」の次の「ファ」が半音ならば、「ファ」は黒鍵として「ミ」の次に位置していればいい。そうすると、「ファ」のシャープが白鍵になり「ソ」は「ファ」のシャープの白鍵の次の黒鍵になる。こういうふうに鍵盤を並べると、白、黒は同数になり、整合性はとれる。世の中は少数だが、そういう鍵盤になっている楽器もある。クロマティックオルガンとか、ボタン式アコーディオンである。

話が複雑になってしまったが、元へ戻すと、私の「ドレミ」に対する根本疑問はピアノの鍵盤では解決できないのだ。

日本はドイツ式音楽教育をアブリオリ（既に決まったものとして）に受け入れた時、時代は大体、1880年ころで、ヨーロッパではそろそろ平均律という調律によるピアノが主流になりかけていた時代だった。さっきもいったようにヨーロッパでは義務教育に音楽は入っていないので、ピアノの鍵盤で音楽理論を説明するという事はない。

ここまで書いて、何かもどかしい気がしてならない。それは、音楽教育にピアノを用い、その調律である「平均律」は日本人の音感をダメにしていることをなかなか説明できないでいることなのだ。

日本が、ドイツ流、音楽教育を教育にとりいれた時、ヨーロッパはやっと、平均律時代を迎えていた。「平均律」の本当の意味は、オクターブを分割しそれをすべて、平均の音程にし、すべての音程を平均的に狂わせてしまった調律なのである。日本人の大半の、恥ずかしいことにプロをも含めた大半が、平均律の音程しか知らず、本当の、ほんものの「ドミソ」の美しさを知らないのである。このほんものの「ドミソ」を純正律、もしくは「純正調」というのだが、この難しい説明はあとで、分かり易く書くとして、私は日本の音楽教育の間違い（多分、井澤修二のまちがい）が、同じ極東の朝鮮半島や、台湾にも同様なものがあるのではないかと思ひ、誰かに話をきこうと思っていた。もちろん、プロ同士としては韓国にも台湾にも知人はいるが、プロとそんな話をするつもりは始めからなかった。私は音楽教育者でもないし、音楽教育を改善しようというつもりも殆んどないからである。だから、音楽とは無縁の、できれば日本人のよくいう、私は音楽ぎらいで、音痴です。という人に話をききたかった。そしてそれが実現した。

☆辛さんとの話

辛さんとはあの辛淑玉さんで、「朝まで生テレビ」等で歯に衣きせぬ発言で並み入る男性をやりこめる女性論客である。九七年の七月始めごろのNHK衛星第二放送、永六輔さんの三時間の生番組「夢でワイドショー」で、ヴァイオリンのゲストとして呼ばれて出演したが、その番組の永六輔さんのパートナーが辛さんだった。

私のCD「玉木宏樹の大冗談音楽会」をお聞きの方はもう先刻御承知のバイオリンを奏きながら同時に口で「ドレミ」を歌ってしまう「熊ん蜂の飛行」と、バイオリンをおもちゃにした「ウクレレバイオリン」をやったのだけど、あまりの奇人変人ぶり？に辛さんは本当に驚いたようで、感心してくれたのが縁で、

これは、よい人と知りあえた、ぜひ、韓国とか北朝鮮の音楽教育事情を聞いてみようと思って、別の日に、色々とお話をきかせてもらったのである。

なぜ辛さんの話を聞きたくなかったのか、それは、もちろん美人の彼女と同じ時間を共有できるという魅力が半分以上だったが、それはともかく、彼女、しきりと番組の中で「音楽」のことはむずかしくて分からないと、ぼやくことしきりで、いつもの斬れ味するどい口調は影をひそめ、心底とまどっている表情が多かったからである。これこれ、こういう「音楽」のことをむずかしく考えてしまう人こそが、音楽教育の違和感を語れるはずだからだ。

少しでもへたを打つと何をいわれるか分からぬという恐怖をちょっぴり抱きつつ、お会いして話を伺うと、何とまあ、豪快に面白いこと、特に男っぽくて、ほんとうに字に書いたように「アッハッハー」と笑う美人である。

彼女とは色々と話がはずみ、あまり音楽的なことでは突っ込んだ話はできなかった。というより、私の目論見がみごとに外れたのである。

私が、この項で書きたかったのは、平均律化してしまった西洋音楽をまるごと信じてピアノ至上主義で教える（戦前は、足踏みオルガン、つまりハーモニウム）教条主義のあやまりをつくつつもりで、朝鮮半島や中国、台湾の教育現状をリサーチしたかったのだが、辛さんと話をしている、すぐに自分のアプローチのせまさに気づき、話題がそれたのだが、それはそれで、大変良いことだと思っている。それはまさに、「音楽を教える」ということが道を踏み外した場合の根本的な恐ろしさである。

彼女が一番印象に残っているのは、北鮮系の学校における、マスゲームの号令一下ピタッと何でもそろってしまう快感だったという。それはもちろん、音楽のリズム教育の名のもとに行われる軍事教練の一種みたいなものだろう。人間一人一人がそれぞれ、歯車の一つにされ、それを「芸術行為」と思い込んで自己陶醉、自己欺瞞するのは、オーケストラや、合唱でも全く同じである。しかし、この全員が一コマになりきって、しかも強制的に訓練された演奏のすばらしさは、もちろん、合唱やブラスバンドでも分かるとおりである。この全員がピタリと息が合うことへのすばらしさを手ばなしでほめているのが、パリへいったモーツァルトで、父に書いた手紙に実によく表現してくれている。「お父さん、パリのオーケストラってすごいんだよ！ なんととっても出だしがピタッと全員合っているんだもんね」

ザルツブルグのオーケストラは、てんでバラバラの演奏だったということがよく分かる。

平均律という超人工的な調律法によって乱暴にもオクターブを十二等分化する単純作業によって、ヨーロッパでも音楽は一挙に大衆のものとなった。ちょうどその時代、一八八〇年頃にドイツ音楽理論（すでに、平均律によって、様々な音程感や、和声法が駆逐され、形骸化していった）を輸入した日本は、西洋文化に追いつくために、国民皆兵制のような文部省唱歌が強制教育された。この文部省唱歌の生みの親、文部省初代音楽取調係（後の上野音楽学校、今の東京芸術大学音楽学部の先祖）は伊澤修二だった。

サピオ七月号に「今想い起こすべき明治の覇気」という特集があり、伊澤修二の業績がしるされている。一八五一年生まれの彼は、十九歳で上京、有名なジ

ジョン・万次郎から英語を習い、明治七年には弱冠二十三歳で愛知県師範学校の校長に抜擢される。(以下はサピオからの引用)

かねてから「新しい時代を背負って立つ有為の人材を育成するには、知識偏重教育では不十分だ。世界の動向に敏感に反応し、未来の潮流を鋭く嗅ぎ取る能力を涵養するためにも、西洋音楽などを通じた情操教育が不可欠である」と主張していた伊澤は、直ちに『教授真法』という本を書きおろし、維新直後の日本の教育界に大きな波紋を呼び起こした。そして、これを端緒に、翌年、遂に念願のアメリカ留学のチャンスをつかんだ。「これからの教育」を学ぶため、マサチューセッツ州にあるアメリカ最古の師範学校・ブリッジウォーター校に派遣されたのである。

たちまち首席クラスの学生となった伊澤にもたった一つ弱点があった。日本にいた頃にはあれほどまでに「音楽」の必要性を説いていたのに、いざ来てみると、見たこともないオタマジャクシ（音符）が飛び交い、何が何やらサッパリ分からず、音楽だけはクラスの中でも最低点だった。ボイデン校長は、大いに同情して、「音楽だけは免除してあげよう」と、温かく申し出てくれた。しかし、伊澤青年は涙を流しながら、「いやしくも日本政府の代表として派遣されてきた身です。どうしておめおめ帰れましようや！」と言って毎晩深夜まで個人レッスンを受けながら、頑張り続けた。

帰国後、初代の文部省音楽取調係という要職についた伊澤修二は『小学唱歌集』につながる日本で最初の西洋音楽集である『唱歌掛図』を作り上げた。有名な『蝶々』や『蛍の光』、『庭の千草』、『霞か雲か』などが収録されていた。

意地の悪い解釈をすれば何のことはない。伊澤修二の音楽コンプレックスが、現在の日本の音楽教育の原点になっているとすらいえないことはない。

前著、「猛毒クラシック入門」に詳しく述べたけれども、当時の日本人は、ドレミという、長二度が二つ続く音階には絶対的な違和感を抱き、特に「鉄道唱歌」なんかは、みんながマイナー、つまり短調で歌ったということである。ジャズ風というならば、ブルーノートということかも知れない。

その後泥沼の戦争状態につっこんでいくにつれ、音楽はマスゲーム的統制の餌食にされ、軍歌の大量生産が続き、太平洋戦争末期には、ついに大政翼賛会作詞作曲、なんと「進め一億火の玉だ」状態にまでなってしまったのだった。

音楽をマスゲームのように扱って軍事教練まがいに使うのは、偽政者にとって、とてもつごうのよいことである。この面からも音楽を義務教育の必修にするのは考えものだと思う。

私は何も、小中学校から、音楽教育をやめろといっているのではない。選択にすればいいと思うのだ。特に中学校の男児にとっては、若い女性の音楽の先生に憧れるということも多いのだから。美人の音楽の先生に憧れて、音楽が好きになった子もけっこういるだろうし。

ところで私は、最初にヨーロッパでは音楽は義務教育の必修にはなっていないと書いた。それを知ったときは、目からウロコ状態で、カルチャーショックを受けたものだった。ところが最近出版された、フランス人、アンソニー・ス

トーの書いた「音楽する精神」（白揚社刊）という本の序文には、「フランスの官僚には、文化を大切に作る気運が全くない。どうして、音楽教育に予算を増やして、カリキュラムにしないのか」と嘆いているのである。どっちもどっちというところか。

余談だが、日本人は国歌をないがしろにする前代未聞の国で、愛国心がない代表のように言われているが、フランスの国歌「ラ・マルセイエーズ」もフランス人には大変評判が悪いらしい。かなり血なまぐさい歌詞のせいだというのはなしだ。所変わりに、隣国の統一ドイツでは、歌詞の内容があまりにも領土問題に関わりすぎているので、三番の歌詞からうたうことになっているのに、最近では愛国的に一番から歌う若者が増えてきているという。多分、日本風に直すと、台湾から樺太まで我が日本というような内容だと思うが、よくもまあと、ドイツ人の我執妄執にはついていけない。それなら「君が代」の歌詞の方が、まだみやびでよろしいじゃありませんか（おっと、私は右翼でも国粹主義でもありませんが）

まあ、辛さんと話していて、音楽教育のまちがいがずい分スケールが大きくなったものである。

というわけで、彼女とのお話は有意義だったが、あと、台湾とか中国の人にも聞いてみようという気は失せた。まあ、それぞれのお国の事情があるのだから、音楽を思想教育につなげようとする国家があっても当然である。そういう体制のものと音楽教育に対して発言する立場に私はいないのだから。

*音楽教育に対する素朴な疑問の数々

さて初心に帰り、わが国の音楽教育に対する素朴な疑問を並べ、答えられるかぎり、答えてみよう。おそらく、学校の音楽の先生が大半は答えられない問題も多々あるはずだ。

1. 「ドレミって一体なんなの？」

学校の音楽の先生にもう一度「ドレミって何なのときいてみよう。多分、半分以上の先生が、ピアノを叩いて、はい、これが「ド」次が「レ」そして「ミ」と答えるだろう。ここでひるんではいけない。誰がこれを決めたのかと質問してみよう。おそらく、半分以上の先生は「昔から決まっていることだ、イロハのような決まりごとだから説明しようがない」と答えるだろう。こんな先生は、まず失格で、子供に音楽を教える資格も権利もない。もう少し、物わかりよくて親切な先生なら、「ドレミ」の音階はギリシヤ時代からある自然法則だと答えるだろう。それはそれで良い。しかし、ギリシヤ時代からその音程や音程関係を「ドレミ」と呼んでいたのだろうか？ とんでもない。

「ドレミ」とは何なのかという質問には二つの意味がある。ひとつは、その音程関係であり、これは、ギリシヤ時代以前からの自然法則であることは間違いない。ただし、現代のピアノの調律に使われている平均律のドレミでは絶対にない。

近代になって技術が発達したから、昔からの「理想」といわれた「平均律」ができるようになった、などというウソ八百を並べるやつがいるが、バカも休み休みいってほしい。だが、学校で全音だの半音だのというめんどくさいこと

をいうから自分は半音を歌えないという人がふえるのである。たかだかオクターブを十二分割しただけの信じられないような大まかな音程がわからないほど人間の聴覚はヤワなものではない。どんな人でも半音の一〇〇分ノ二の違いがわかるなんてにわかには信じられないかも知れないが、格好の良い例がある。

ある年のプロ野球名鑑の太洋ホエールズの選手紹介の中で二名の特技の項が燦然と光っていた。二人の特技はなんと、ピアノ調律と書いていたのである。それも道理で、二人は浜松のある楽器メーカーのノンプロ出身者だったのだ。

少し訓練すれば、どんな音痴を自称する人でも割と簡単にピアノ調律を習うことはできる。ピアノ調律の基本は音程を狂わせることにあるからである。まずは基本のAを四四二キロヘルツに合わせる。これは、音叉でもチューニングマシンでもよい。それから完全五度上の「ミ」を正確に合わせる。これを唸りの全くない純正な完全五度に合わせるのは少し難しいかも知れない。しかし、それをクリアできればあとは簡単、その純正な響きの完全五度を半音の一〇〇分ノ二、狭めるのである。すごく難しいことのように思えるが、これはけっこう簡単なことなのである。純正な五度の音程は済みきっておりなんの濁りもない。しかし、その音程を一〇〇分ノ二、狭めると、約0.8秒に一回、ワンワンと唸りを生じるのである。この回数をチェックすることが平均律の調律法なのである。

話はかわるけれど、私がマッキントッシュのパソコンを買ったときは、カラー表示は十六色だったが、パワーマシン（もちろん当時での）は二五六表示ができた。これだけでもずいぶん色は細かく、鮮明になったものだった。ところが今は、約三万二千色、最大千六百七十万色になっている。こんなグラデュエーションは、当然一般人には必要ないものだ。それでも、色の三原色とか、基本の虹の七色とかからの組み合わせによる無数に近い色遣いは、人によるけれども、識別は可能なはずである。それとくらべて、オクターブを十二分解しかないシンセサイザーなんて、ほんとにお話にならない。

声を大にしていおう！ 人間の耳をバカにしてはいけない。人間の耳は、オクターブの十二分割ではなく、もっともっと微妙な音程を求めていると！

コンピュータとドッキングしたシンセサイザーなら、オクターブを無限に近く分割することはできる。現にBEND情報を駆使すれば、半音を8191に分割できるのである。いまBENDは単に演奏ニュアンスの付加価値にしか使われていない。今でも、市販されているシンセ、及び、モジュールでは、あのいやで複雑な十六進法というコンピュータ用の数字を打ち込まないと、細かいピッチの変化はできない。そんなことより、今すぐにでもできるのは、今のシンセの音程（いわゆる平均律のドレミ）でも、半音の一〇〇分の一のシフト変更は、原則的には可能なのだから今すぐにでも、そちらの方へ方向転換してほしいものだ。どんなに音痴を自慢する人でも、一〇〇分の一の違いをスライドしていけば、絶対に違いは分かってくるものだ。それだけ音楽の表現力も広がるし、もっと思っても見なかったような新しい音楽が生まれてくるはずだ。

書きながら気がついたことだが、「音痴」と言うことばは、どんな場合でも差別用語には使っていない。それに比べ、「色盲」という言葉は非常に使いにくい。それだけ、「音痴」と言う言葉に科学的根拠がないという証拠だろう。

さて、「ドレミ」の起源のもうひとつ、なぜ「ドレミ」と呼ぶのかということだが、こんな簡単なことすら教えてくれる先生はあまりいない。「アイウエオ」という日本語の発音の起源が分からないというほど「ドレミ」の起源はあいまいなものではない。実に簡単なことである。一〇世紀、西暦九九五年にイタリアのアレッツォという所に生まれた、グイドという高僧の作曲したヨハネ讃歌の一行ずつの音の高さが今のドレミファソラで始まっており、しかもその詩の先頭の文字が、Ut.Re.Mi.Fa.Sol.La だったので、それから、音の高さをそう呼ぶように習慣化しただけのことである。そして、Ut (ユト) は後に発音しやすいように Do となり、一七世紀はじめに Si が追加された。この追加された Si が後々、論議を呼ぶことになるのだが、それは後の項にて。

余談だが、某有名歌手が訳詞した「ドレミ」の歌の日本語の歌詞はあまりにも有名だが、国際的にはとても恥ずかしくて絶対にうたえるものではない。「ドーはドーナツのド」はいいとしても、「レはレモンのレ」はおかしい。Re は Lemon の Re (Le?) といっているのだから、R と L の発音の分からない日本人の典型的な恥である。

今後のスケジュール

2015年1月10日土曜日 12時30分開場 13時開演

【シルバーマウンテンコンサート】

会場：洗足学園音楽大学内【シルバーマウンテン】1F

(JR南武線「武蔵溝ノ口」駅、東急田園都市線、大井町線「溝の口」駅南口下車徒歩8分)

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

曲目：愛燦々、悠久のケルト、白鳥、歌の翼に、他

入場料：2,000円



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

http://just-int.com/

平成26年11月20日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫